



志賀直哉

尾崎一雄

志賀直哉

昭和六十一年九月三十日初版第一刷発行

著者 尾崎 一雄

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—九一

電話 東京(29)七六五一(営業)

東京(29)六七一一(編集)

振替 東京 六一四—二二三

印刷 株式会 社 精興社

製本 矢嶋製本株式会 社

落丁・乱丁本はお取替致します

目次

I

奈良日記抄（一）

五

奈良日記抄（二）

二五

奈良日記

二六

雜筆

三三

『颱風』を読んで

三八

奈良行

四一

『暗夜行路』完成

四四

志賀直哉の持ち味

五〇

志賀直哉について

五

沓掛の夏

六

志賀直哉先生の横顔

七

志賀直哉先生のこと

一〇

志賀直哉訪問記（一）

二〇

志賀直哉訪問記（二）

二四

II

盛夏抄

三五

— 志賀先生の本のこと・その他 —

志賀先生のこと二つ

一四

志賀直哉の日記から

一五

志賀先生との半日

一六

「君去りの詩人」のこと

一七

稲村大洞台

一七

志賀先生に関するメモ

一八

一冊の本

一九

— 志賀直哉第一小説集『留女』 —

志賀直哉旧蔵『白樺』始末

二〇

志賀直哉

二一

Ⅲ

志賀直哉

—作家と作品—

三五

後記

紅野敏郎
二七

志賀直哉

奈良日記抄（二）

志賀さんと犬

夏の夕暮、志賀さんの家の庭に水を撒く、水は水道から長いホースで引き、植込み、花壇、芝生、一面に降らす。奥さん、子達、皆見て居られる。犬も三匹見てゐる。グレイファウンドのナカ、セパードのホクは黙つて立つて居るが、イングリッシュ・セッターのヨネが元気に跳ね廻り、筒先に大口を開けては水を飲まうとする。

「こら」と志賀さんが筒先を真向きにすると流石にひるんで、一時退却するが、また向つて来る。全身びしょ濡れではしやぎ廻つてゐる。

やがて水撒は済み、涼しい芝生の真中に卓子を持ち出して休んだ。ヨネはまだ駈け廻つてゐる。
「あれが一番年寄りでせうが、元気ですね。いくつです」

「八つかね」

「八つだと年寄りなんですネ。人間にしたらどの位でせう」

「僕位かね」

「ハハア」僕は肚の中で、志賀さんは四十八だと思つて見た。そして、せんだつて、角力をして志賀さんに負け、口惜しかつたことを思ひ出した。

「何しろ元気なものですネ」

「あいつ気が若いんだね」

その時、向うの縁側に居られる奥さんが、「ヨネは一番年寄りのくせに、子供つばいんですよ。お父さんとそりやア氣が合ふの」と云はれた。みんな笑つた。志賀さんは笑ひながら、跳ね廻るヨネを眼で追つて居られたが、

「オイ、ヨネ」と号令かけるやうに云はれた。

「ヨネ、こゝへ来い」

ヨネは立ち止り、こつちを見てゐる。

「ヨネ、来い」

「ヨネ、お父さんとこへいらつしやい。お話があると」奥さんが笑つて云はれる。

ヨネが側に来た。

「なあ、ヨネ」

頭を撫でて居られたが、やがて、エア－シップの煙をヨネの顔に吹きかけられた。ヨネは変な顔をして急いで逃げて行つた。子達の賑かな笑声が起つた。(最近はずかしく居ない。)

志賀さんと将棋

志賀さんと将棋さすのは辛い。了ひには僕も、極力辞退するやうになつた。小説にしばしば頭を出してゐるあの意地悪さで、グイ／＼いぢめ抜かれるのだから堪らない。

「もうありません。負けました」

駒を崩さうとすると、志賀さんが、

「そんなことはない、待て／＼。かうつと——」

「そりや、逃げ路はまだあるでせうが、知れてゐますよ。どうせ詰みです、参りました」

「いや、案外これで手がありさうだぜ。兎に角逃げて見給へ」

「かうですか。ぢやア——」駒を動かすものの、「弱つたなア」と僕は頭を搔く。見てゐる若山為三さんや加納和弘君が、「始まつたぜ」とニヤ／＼してゐる。「この、高見の見物奴」と僕が不平を云ふと、志賀さんまで笑ひ出される。

「さてと。——これで王手」

「もういけません」

「だつて、そつちへ逃げたらどうだ。まだ息はある」

「息はあつたつて——つみですよ、そんなに」

「角打ちの王手で——手は？ 金銀桂の歩沢山か。合が効くと。尻から銀打ちと行けるね。面白いな、どこへ持つてつて詰めてやらうかね」——虐殺である。

或夜、九時頃、御邪魔しました、と立ち上ると、

「まあいいや。も少し居給へ。一番指さうか」と云はれる。

「将棋ですか——」と情けない面を面白さうに見ながら、

「こつちだけ条件つきと云ふことにしてやらう。余り弱いんで手ごたへが無い。○○提供しよう

ぢやないか」さつきと盤を持つて来られる。

「〇〇は欲しいけど、何しろ残虐極まるんですからね、バルチザンみたい。——義憤を發しますよ」

「実は、今夜武者が来るんだ。さつき電報が来た。一人で待つてるよりいいや」と、もう駒を並べて居られる。

二回続けて虐殺された。時計を見ると、十一時だ。

「武者さん、随分遅いんですね。若しかしたら延びたんぢやないでせうか」そろそろ逃げを打つ。「今夜遅く行くと云ふ電報だった。武者と云ふ奴は馬鹿に几帳面な男で、遅くと云つたら必ず遅い。今に来るだらう。もう一ぺん指しながら待つて居るとしよう」

「判りました」僕は観念した。指しながら、志賀さんの「鳥尾の病氣」と云ふ短篇を思ひ出して居た。「鳥尾」が武者さんで、「山本」と云ふのが志賀さんだ、将棋は——珍らしく僕がいい。もう終盤で、何だか詰みがありさうに思へる。平手で、五度に一度位しか勝てないのだが、こいつはことによると、と僕が熱中し出した。

玄関で鈴が鳴つたやうだった。女中が入つて来て、

「武者小路様がお見えになりました」と云つた。